

信州大学から国際医療福祉大学への軌跡

津島 健司

はじめまして。

信州大学医学部を平成6年に卒業し、関口守衛教授の内科学第一講座に入局、その後は長野県の関連病院や内科学第一教室で研修をさせていただいた津島健司といます。信州大学では医学部学生時代には、橋本隆教授の生化学教室に3年生の時点から6年生まで通い、青山敏文教授のもとで基礎実験に関して学ばさせていただきました。卒業後は信州大学内科学第一講座に残り、附属病院に当時おられた多くの諸先生方にご指導を受けてきました。先日、内科学第一教室の70周年記念式典では、ほかの診療科の先輩の先生方にお会いし、よく目立つ生意気な若手医師だったような話をさせていただき、ご迷惑を相当おかけして今の自分が形成されてきたのかと思われました。良い意味ではそれだけ目立つ医師で、それなりの働きをしていたということにもなるのかと解釈しております。

若手医師であった当時、自分に常に課していたのは、諸先輩方と同じようなレベルの頭には到底およばないため体力でそこを補い、何でも吸収して、これはと感じたことを論文に書いていこうという心構えでした。長野赤十字病院の研修医時代には、「内科医ならば首から上で勝負しろ」とも言われていました。卒後1年目には日本語症例報告を書いて医学に慣れる、2年目からは英語の症例報告を書く、そして研修を終えて大学に戻ってからは臨床論文を書くと自分に課してきました。医学博士を得て、旧安曇総合病院に出た際には、放射線科曾根脩輔元教授がいらしたので、そこで放射線と呼吸器を合わせた英語臨床論文をいくつも書いて大学に帰り咲いてやると意気込んでいたのを思い出します。また、診療面では、先輩医師が医療に関して当然の結果のように言われていることでも、本当にそのことは生理学的に、病理学的に本当に正しいことを言われているのかというのを自問し、病理学的に実際に生じていることを確認するようにしてきました。尋常ではないくらいの剖検に立ち会って、自分の目で生じていること臨床的に起こっていることは何だったのかを考えていた記憶があります。

久保恵嗣教授のもとでは、「身体症候を適切にとらえ、その病態を吟味し、疾患を把握する。その際に必要ならば実験を加えて実証するべき」と教えられました。この考え方は今でも自分の中では必ず患者さんには聴診器を当て、診察をし、そして、できる限り検査などで病態を詰めてから治療を行っていくということにつながっています。この時期は医学や臨床が非常に面白く、楽しい呼吸器内科での時期を過ごせていたと思います。その甲斐もあり、この時期の論文作成は一番多く、現在の自分の立場を作ってくれたと思いますので、感謝できません。しかし、ある程度まで大学にいますと、更に新しいことを目指してみたいという気持ちも芽生えてくるので、信州大学の中だけにいるのではなく、外の世界で勝負をしてみたいと思い、アメリカでも Best of the best の Johns Hopkins 大学へ留学し、非常に優秀な研究者たちがいる中で自分がどこまで通用するかを試しました。さらに信州大学という枠の中から飛び出し、東京医科大学に出てみました。残念ながらそこで大きな挫折をし、これまで作ってきた医者人生は終了したなと感じていましたが、たまたま、次のステップを求め

ているところに千葉大学呼吸器内科巽浩一郎教授に拾われ、運よく移動することができました。そこでは、多くの優秀な仲間にも恵まれ、巽浩一郎教授には、病棟診療はすべて任せられ、大好きな診療を中心にできたので本当に生き生きとやることはできました。

この2つの大学の教授を鑑とし、ともに共通していたのはある程度の自由度を持って、その人間の活かす方法は どうしてあげることが必要なのかを考えてあげなくてはいけないということ学びました。おそらく、医学部を卒業してきても、一人一人の育つ環境や希望は異なるはずで、そこを見極めて、何を求めているかを見抜いてやり、その道へうまく進めてあげることが上にいる人間にとって大事な力量ではないかということを感じさせられました。そういう意味では、卒業してから終始天狗であった自分を久保恵嗣教授はうまく操っていただいたと思いますし、巽浩一郎教授は外部から来たものを適所に添えていただけたなと思います。

2017年1月に国際医療福祉大学呼吸器内科の主任教授選考に千葉大学から推薦されました。これは、信州大学時代の業績が大きく評価されたと思っております。もちろん、東京医科大学や千葉大学でも新しい業績やその指導をしていたことも評価されてのものと思っています。教授という職位を拝命しているので、この国際医療福祉大学の呼吸器内科を作り上げていくことは自分が仕えた教授からの教えを実践するチャンスと思っています。当大学は、各学年20名の留学生と120名の日本人学生が現在4学年いますので、この学生に対して呼吸器内科の魅力をいかに魅せられるかを次の課題と思っております。そのような折、国際医療福祉大学成田病院が2020年4月より開院するということから、その下地を作るべく副院長予定者に宮崎 勝病院長から2020年1月に推薦されました。なにもないところから、宮崎 勝病院長の片腕の一人として病院を立ち上げていくことは何よりも喜びの状況でありました。2019年末に新型コロナウイルス感染症なる新規感染症が中国武漢にて流行していることを横目に、自分たちには関係のない世界の疾患だろうと病院の立ち上げに奔走しながら当初は考えていました。しかし、2020年2月ころから、その疾患に当院も翻弄され始め、3月16日には前倒しで開院し、新型コロナへの対応は呼吸器内科医でもある津島が副院長として対応していくようにと指令が出ました。感染症医1人と私で4月までの2週間、病棟を維持するのは命を削る日々でした。自分の生命も危機に瀕する可能性がある、また、知らない顔ぶれの中で診療の代表として看護師やコメディカルの方とともに戦うことは重責でした。このような状況を打破するには、皆が不安な状況に置かれていましたので、強いリーダーシップをだれが発揮するか、そして、だれが決定したことに責任を取るかなどが求められ、副院長としての、このコロナ対策の責任者としての自覚を植え付けられ、信州大学での養われた忍耐力と行動力が試された気がします。

現在もまだ終焉へと向かっている状況ではありません。しかし、3月から日々続けてきた看護師を含むコメディカルの方との朝の新型コロナ対策会議は毎日続け、皆で改善しながら現在も進めています。新型コロナ患者は急速に呼吸状態が悪くなる方も多く大きなストレスの中での闘いです。そのような環境下でも、留学先で常に言われた「Are you happy?」の精神で、楽しく進められる職場づくり、そのような環境にするように仕向けています。コロナ病棟の運用は非常に大変ですが、仲間内では、少しでもHAPPYを作り上げられるようにこれからも頑張っていくつもりです。皆様も今の仕事が楽しいかということ、HAPPYとなるように仕向けながらその方向にみんなを巻きこみながら進んでいきましょう。

コロナ病棟より

(国際医療福祉大学医学部呼吸器内科学主任教授、国際医療福祉大学成田病院副院長)